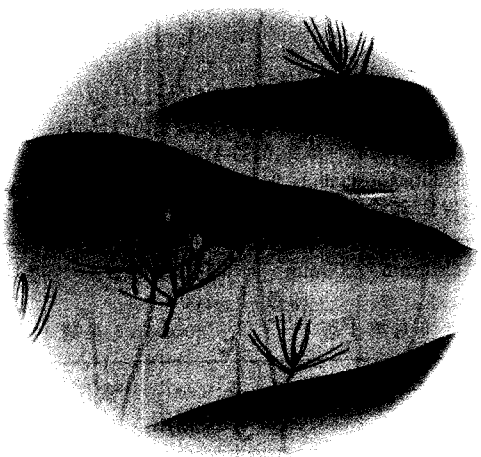


高等学校日语教材

日本語通論

日本語通論

崔崧◎著



大连理工大学出版社
DALIAN UNIVERSITY OF TECHNOLOGY PRESS

© 崔崧 2003

图书在版编目(CIP)数据

日本語通论 / 崔崧著. — 大连: 大连理工大学出版社, 2003. 6
高等学校日语教材
ISBN 7-5611-2346-9

I. 日… II. 崔… III. 日语—高等学校—教材 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2003)第 000045 号

大连理工大学出版社出版

地址: 大连市凌水河 邮政编码: 116024

电话: 0411-4708842 传真: 0411-4701466 邮购: 0411-4707961

E-mail: dutp@mail.dlptt.ln.cn URL: <http://www.dutp.cn>

大连业发印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸: 140mm×203mm 印张: 9.25 字数: 229 千字

印数: 1~3000

2003 年 6 月第 1 版

2003 年 6 月第 1 次印刷

责任编辑: 王佳玉 于福岳

责任校对: 樱 梅

封面设计: 王福刚

定 价: 18.00 元

前 言

《**日本語通論**》原是作为吉林大学外国语学院日语系本科高年级及硕士研究生日本语言学教材而编写的。经过多年的教学实践,本书已几易其稿。特别是笔者利用 2000 年 4 月~2002 年 4 月在日本讲学的机会,在参阅了大量最新资料的基础上,从内容和结构上都做了较大的改动。

本书的编写以理论与实践相结合为着眼点,力求全面、系统、简明、扼要地阐述现代日本语言。全书由四章构成:第一章日语语音与音韵;第二章日语文字与表记;第三章日语语汇与语义;第四章日语语法。与同类书相比,本书有以下几个特点:

一、内容广泛。从语音文字到词汇语法,本书涉及了现代日语的方方面面。人们常说,学科相互渗透,知识触类旁通。通过阅读本书,读者可对现代日语形成一个整体框架。

二、取材新颖。为编写本书,笔者曾参阅了历年来特别是近年来日本的国语学、日本语学、我国国内的日语研究、日语教育的最新研究成果。例如,在敬语一节中,将日本新一代的日本语学专家、学者近一两年的观点融于本书之中。

三、编排合理。考虑读者使用方便,各章节的开头部分都对本章节的内容做了总体概括。在各章节的结尾部分就其特点逐条进行总结。例如,在授受关系一节中,通过「注意点」把授受关系的特性及难点归纳为七条。另外,为突出重点,每小节还增设了「研究课题」一栏。

四、针对性强。日本出版的「国語学」是以日本人为读者对象,主要从历时语言学的角度概述日本語。本书是以中国日语学习者作为读者对象,从共时语言学的角度概述日本語。为加深印象、便于理解,各章节常常采用中日语言对比的方式进行阐述。例如,语音部分的音节、文字部分的汉字、语汇部分的汉语词汇等。

笔者认为,欲阐述一国语言若使用他国文字势必隔靴搔痒、令人费解。况且,对读者而言,相关的专业术语又难以查找,因此,本书行文通篇使用日语。

五、浅显易懂。本书虽用日语行文,但尽量避免使用生僻晦涩的语言,而且对专业术语所下的定义尽量使之条理化、简单化。例如,「調音点と調音法」「モーラと音節」。这样,读者在学习语言知识的同时也提高了自己的日语阅读能力。

六、有独创性。历来阐述日本语言的著作,多注重于语音、语汇、语法,很少涉及文字。笔者认为,与其他语言相比,日语中的文字与表记复杂多样、自成体系,在日本语言中起到了举足轻重的作用,因此有必要单做一章来表述。笔者曾就日语文字发表了几篇学术论文,其主要观点也体现在这一章中。

本书读者对象为大学日语专业三、四年级本科生、研究生及从事日语教育、日语研究的教师和研究人員。另外,因其可读性,也可适用于具有中级以上日语水平的日语学习者。

在本书的出版和编写过程中,曾得到原吉林大学日语专家井上玲子女士的真诚帮助。特别是东京外国语大学川上京子教授在百忙之中为全书进行了仔细的审校。值此机会深表谢意。

由于篇幅及笔者能力所限,本书不可能涉及所有的语言现象,更不可能对某一语言现象剖析得很深很透。不足之处敬请同行及读者批评指正。

崔 崑

2003年6月

目 次

第一章 日本語の音声と音韻	1
第一節 音声学あれこれ	1
一、音声と音声学	1
二、音声器官	3
三、有声音・無声音	3
四、母音・子音・半母音	4
五、調音点・調音者	5
六、調音法	6
研究課題	7
第二節 日本語の発音の単位	7
一、仮名の単位	7
二、モーラと音節	8
三、ローマ字の単位	9
四、単音と音素	9
五、音素と異音	10
六、拍と音素の関係	11
研究課題	12
第三節 日本語の発音と問題点	12
一、母音	12
二、母音の問題点	14
三、子音	16

	四、子音の問題点	19
	五、半母音	22
	六、特殊音素	23
	七、日本語の音節	27
	研究課題	29
第四節	日本語のアクセント	29
	一、アクセントの性質と種類	29
	二、日本語のアクセントの機能	30
	三、共通語のアクセント	31
	研究課題	40
第五節	イントネーション	40
	一、イントネーションの性質	40
	二、イントネーションの種類	41
	研究課題	42
第六節	プロミネンス	43
	一、プロミネンスの性質	43
	二、プロミネンスを表す方法	43
	三、プロミネンスの型	44
	研究課題	45
第七節	音声文法	46
	一、語レベルにおける音声	46
	二、文節レベルにおける音声	46
	三、文レベルにおける音声	47
	研究課題	48
第二章	日本語の文字と表記	49
第一節	文字の性格	49
	一、文字とは何か	49

	二、文字の役割	50
	三、文字の分類	51
	研究課題	52
第二節	漢字	52
	一、漢字の特色	52
	二、漢字の構成	54
	三、漢字の組み立て(部首)	56
	四、漢字の機能	58
	五、漢字の読み方	63
	六、漢字の書き方	70
	七、国字と宛字	71
	八、現代の漢字の意味	72
	研究課題	74
第三節	平仮名	74
	一、万葉仮名	75
	二、平仮名の辿り	75
	三、漢字平仮名交じり文	76
	研究課題	77
第四節	片仮名	77
	一、片仮名の使用	77
	二、片仮名の字体	78
	研究課題	79
第五節	ローマ字	79
	一、ローマ字の辿り	79
	二、ローマ字の使用	83
	研究課題	84
第六節	日本語の表記	84
	研究課題	86

第七節	符号	86
	一、句読点	86
	二、くりかえし符号	89
	研究課題	90
第三章	日本語の語彙と意味	91
第一節	語彙総論	91
	一、語彙研究	91
	二、日本語語彙の特徴	94
	研究課題	96
第二節	語・語彙・語彙論	96
	一、語と語彙	96
	二、語彙論	98
	研究課題	106
第三節	意味	106
	一、意味の性質	106
	二、対象的意味と感情的意味	107
	三、意味の構造と発展	109
	研究課題	113
第四節	単語の系列	113
	一、類義語	114
	二、反対語	115
	三、意味の広い単語と狭い単語	117
	四、同音語	118
	研究課題	119
第五節	単語の位相	120
	一、総括	120
	二、特定の分野で使われる単語	121

	三、特殊な文体の単語	122
	四、特定の使い手だけが使う単語	122
	五、古い単語と新しい単語	124
	研究課題	127
第六節	語種	127
	一、概説	127
	二、和語	130
	三、漢語	132
	四、外来語	134
	五、混種語	139
	研究課題	141
第七節	単語の構成	142
	一、合成	142
	二、複合	144
	三、派生	147
	四、転成語	149
	五、略語	150
	研究課題	151
第八節	特殊語彙	151
	一、擬音語・擬態語	151
	二、慣用句	153
	研究課題	154
第九節	辞書	154
	一、辞書の種類	155
	二、国語辞典の内容	156
	研究課題	158
第四章	日本語の文法	159
第一節	文法と文法論	159

	一、文法と文法論	159
	二、文法学説	160
	三、文法の単位	173
	四、品詞分類	181
	研究課題	184
第二節	体言	185
	一、名詞	186
	二、形式名詞	187
	三、数詞	188
	四、代名詞	190
	研究課題	193
第三節	用言	193
	一、活用とは	194
	二、動詞	195
	三、形容詞	198
	四、形容動詞	201
	研究課題	203
第四節	助詞・助動詞	203
	一、助詞	204
	二、助動詞	210
	研究課題	213
第五節	その他の品詞	213
	一、副詞	213
	二、連体詞	216
	三、接続詞	217
	四、感動詞	219
	研究課題	221
第六節	日本語のボイス	221
	一、受身表現	222
	二、使役表現	226

	三、可能表現	228
	四、自発表現	230
	五、授受表現	231
	研究課題	239
第七節	日本語のテンス	240
	一、テンスの定義と特徴	240
	二、テンスから見た述語の分類	241
	三、文末に現れる「ル」と「タ」	242
	四、文中(従属節末)に現れる「ル」と「タ」	244
	五、いろいろなムードの「タ」	246
	六、注意点	248
	研究課題	252
第八節	日本語のアスペクト	253
	一、アスペクトの定義と特徴	253
	二、テ形＋補助動詞	254
	三、動詞の連用形＋補助動詞	261
	四、その他の形式	263
	五、注意点	264
	研究課題	265
第九節	日本語の敬語	265
	一、敬語の性格と分類	265
	二、素材敬語と対者敬語	266
	三、尊敬語	266
	四、謙讓語・丁寧語	268
	五、丁寧語・美化語	271
	六、注意点	274
	研究課題	278
主要参考文献		279

第一章 日本語の音声と音韻

第一節 音声学あれこれ

一、音声と音声学

1. 音声

一般的な語としての「音声」は「声(こえ)」及び「音(おと)」と同義・類義の語として使われている。例えば「テレビが故障して映像は出るが、音声が出ない」などと使われる。しかし、音声学で言う「音声」は学問上の用語(術語)の一つであって、特別の意味を持っている。最も新しく出版された第五版の『広辞苑』には次のように書いてある。「人間が発声器官を通じて発する言語音。また、テレビなどの音」。さらに『国語学辞典』の柴田武氏の定義を簡条書きにすると、音声とは

- (1)人間が
- (2)コミュニケーションのために
- (3)音声器官を使って発する音

である。

以上のどの定義によっても、あくび、いびき、うがい、くしゃみ、げっぷ、しゃっくり、せきなどは音声器官であるのど、口、鼻な

どが関係していても、言語音あるいはコミュニケーションのためではないから、生理的な音、反射音などと考えられる。また、何らかの意志や感情の伝達のために発せられる口笛、キスの音、舌打ち、咳払い、笑い声などは表情音で、非言語音とされ、言語音である音声とは区別される。

2. 音声学

音声学について、代表的諸説を引用しよう。

『国語学辞典』(服部四郎):人類の言語行動の音声面…を対象とする経験科学。

『音声学大辞典』:諸言語の本質たる「音声」について、その構造・条件・活動・応用などの全面にわたって…観察し検討する総合的科学。

『国語学研究辞典』(上村幸雄):言語の音声を研究する言語学の下位分野。

『日本語音声学』(天沼寧他):この音声について、その性質・種類・分類・形づくり方・機能などについて、また、その聞こえ方及び「オト」としての物理的性質などを対象として、観察し、研究する学問の一分野である。

音声学はさらに次のように大きく三つに分けられる。

- (1)調音(生理的)音声学
- (2)聴覚(心理的)音声学
- (3)音響(物理的)音声学

これらの名称から察せられるように、音声学は生物学、医学、社会学、物理学、機械工学、言語学、日本語学などと深い関係を持っている。

本章では、日本語教育の観点から、調音音声学を中心に日本語

の音声を概観してみたいと思う。

二、音声器官

発声・発音器官、調音器官などとも言われ、肺、気管、喉頭(声帯など)、咽頭、口腔、鼻腔などから成っている。上記の喉頭と咽頭、口腔、鼻腔、つまり喉頭から上の部分を声道と言う。図1は声道断面図を抽象的に示したものである。

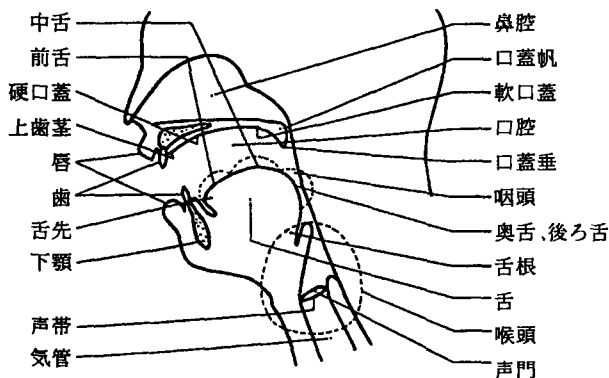


図1 声道断面図

「音声」の表出には、普通呼気が用いられる。呼気は肺から送り出され、気管・喉頭・咽頭を通り、さらに共鳴腔(口腔・鼻腔)を通過して外部に出るのであるが、この間に「音声」が形成される。

三、有声音・無声音

音声気管は図1のような一本の管である。呼吸によって鼻または口から吸い込まれた空気(吸気)は肺に達し、また肺から送り出される。肺からの呼気は喉頭にある声帯を通るときに「声」となるか「息」となるかが決まる。声帯は左右一対の唇のような

もので、声帯の入り口、つまり合わせ目を声門という。

1. 有声音

有声音(声を伴う音声)は閉じている、あるいは狭まっている声帯を呼気が通りぬけようとして、振動を起こして発せられる音。

2. 無声音

黙って静かに呼吸しているときは、声帯は開いていて呼気もそのまま通りぬけるので声にならない。無声音(声を伴わない音声)はこの息の音である。

呼気の圧力が大きければ、声帯は大きな振幅で振動して大きな声になる。または、声帯が緊張し、あるいは部分的に振動し、振動数が多くなるにつれて高い声になる。

四、母音・子音・半母音

調音音声学的に音声を大きく次の三つに分類できる

1. 母音

声道内に閉鎖や狭めがなく、声帯の振動を伴う有声音が自由に響きよく発せられる音。

2. 子音

声道内の閉鎖・狭めなどの障害により作られる音。

3. 半母音

母音によく似た有声音だが、わずかながら声道内の狭めを伴ったり、持続時間が短かったりする。母音と子音の中間的音とも考えられる。子音と一括して扱う文献もある。

五、調音点・調音者

声帯を通りぬけてきた有声・無声の子音は声道の各部分の相対的な形・閉鎖・狭めなどにより分類される。声道上部のあまり動かない部分、つまり上唇、上の歯、上の歯茎、硬口蓋、軟口蓋などを「調音点」と言う。これに対して比較的動きやすい下の部分、下唇、下の歯、舌などを「調音者」という。

調音点と調音者は近いもの同士で調音に関係するのが普通である。分類上の名称は調音点によって代表されるものが多い。現代東京語の代表的子音に関係のあるものは次の通りである。

1. 両唇音

上唇と下唇の音。マ、バ、パ行およびフの子音。

2. 歯音

上の歯と舌先の音。サ、ス、セ、ソ、ザ、ズ、ゼ、ゾ、ツの子音。

3. 歯茎音

上の歯茎と舌先の音。ナ、ラ(ニは少し後ろ寄りで行)およびシ、ジ、タ、チ、テ、ト、ダ、デ、ドの子音。

4. 硬口蓋音

硬口蓋と中舌の音。ヒの子音。

5. 軟口蓋音

軟口蓋と奥舌の音。カ、ガ行およびガ行鼻濁音の子音。

6. 口蓋垂音

口蓋垂と奥舌の音。語末のンの音。

7. 声門(喉腔)音

声門の音。ハ、ヘ、ホの子音および「アッ」などの最初と最後に現れる音。